

タイトル	資料紹介守谷富太郎の「アララギ」掲載歌
著者	田中，綾；中崎，翔太；TANAKA, Aya；NAKAZAKI, Syouta
引用	北海学園大学人文論集(58)：306(1)-278(29)
発行日	2015-03-31

資料紹介 守谷富太郎の「アララギ」掲載歌

田 中 綾・中 崎 翔 太

キーワード 斎藤茂吉、守谷富太郎、「アララギ」、北海道中川郡中川町、志文内、拓殖医、北見市、北網圏北見文化センター

守谷富太郎（一八七六・明治九年～一九五〇・昭和二十五年）は、近代短歌を代表する歌人の一人、斎藤茂吉（一八八二・明治十五年～一九五三・昭和二十八年）の実兄である。明治末期に北海道に渡り、当時まだ課題山積であった地域医療に尽力した医師としても知られている。

一九三二（昭和七）年、茂吉が兄富太郎を訪ねて北海道中川町志文内（現、中川町共和）に残した足跡は、中

川町エコミュージアムセンター編「斎藤茂吉・兄弟ゆかりの地 志文内」（二〇一三年十月刊）等に詳しい。^①

富太郎は晩年を北見市で過ごしたため、その縁で、同市出身の中崎翔太さん（十八期生・二〇一三年度卒業）が、卒業論文のテーマに守谷富太郎を選んだ。本資料は、その別添資料として提出されたものを精査し、新たに『アララギ年刊歌集』収録歌も補記したものである。

学芸員課程で熱心に学んだ中崎さんは、持ち前の探究心と資料／史料の読解作業を通じて、富太郎・茂吉兄弟の交流の実証に挑んでくれた。時間の制約もあり、論文自体には残された課題もあるが、何より守谷富太郎の短歌をまとめて活字化することは、今後の斎藤茂吉研究^②、

「アララギ」研究、及び北海道短歌史研究に大きく資するものと思い、本紀要に収録することとした。

収録にあたっては、中川町短歌フェスティバルで長く審査委員をつとめておられる歌人の西勝洋一氏に、懇切なアドバイスをいただいた。また、守谷富太郎の御令孫であり、数多くの資料を北見市に寄贈された守谷俊一氏には、お電話であたたかい励ましの言葉をいただいた。お二方には深く感謝申し上げます。(田中 綾)

私が卒業論文のテーマに守谷富太郎を選んだきっかけとなったのは、学芸員課程の活動の一環として、北海道北見市にある北網圏北見文化センターを訪れたことによるところが大きい。

拓殖医として北海道内の地域医療に貢献した守谷富太郎は、晩年を北見市で過ごした。富太郎の没後、彼が遺した茂吉の関連資料が、富太郎のご遺族によって北見市に寄贈された。私は同センターに保存されているこれらの資料の解説をうけ、このとき初めて守谷富太郎の存在を知った。そして同時に、故郷にゆかりのある文化人と

して、守谷富太郎に興味をもった。これが卒業論文のテーマに決めたきっかけである。

論文作成の過程では、中川町志文内(現、中川町共和)や山形県上山市にある斎藤茂吉記念館への訪問を計画していたが、時間や予算などの制約から断念せざるを得なかったのが心残りである。

しかしながら、電話でのインタビューに応じてくれた守谷俊一氏、北網圏北見文化センターに勤める柳谷卓彦学芸員、お二方の協力を得て、卒業論文を完成させることができた。論文作成の指導をしてくれた田中綾先生にも併せて、心より感謝申し上げます。

また、卒業論文の完成・大学卒業を区切りとせずに、今後とも研究や文芸活動を継続していきたい。

(中崎翔太)

※以下の守谷富太郎の短歌は、昭和十〇十九年刊の「アララギ」誌で、「北海道 守谷富太郎」の氏名で確認できた四六七首である(巻末に、それら以外の三首を補記した)。

「アララギ」第二十八巻（昭和十年）

◆昭和十年五月号（第二十八巻第五号）

汽車に乗り讀みたる今朝の新聞に想ひ出多き征露の記事あり 登別温泉行の汽車中

若かりし日の戦ひも三十年を過ぎ來て我も老いにけるかな

眼のとどくかぎりさへぎるものなし石狩の野はひろびろとして

温泉の宿のさわぎいつしかしづまりて木かげさびしき月明りかも

崖下に赤土はこぶ櫓馬のせはしき息の白く見ゆるもいつしかに樽前山に春日さし白き煙は立ちのぼり居り

◆昭和十年六月号（第二十八巻第六号）

我が室の窓より見ゆる日和山白き煙はたえずのぼれり

登別温泉

朝ぼらけ雪ぬかる路踏みき妻とつれだち湯の沼を見る

けさもまた鴉は啼けりいざ起きて湯にひたりつつ足伸ばさむか

高貴なる人のやどれる日本間のすがしき室に寝てみたきもの

湯にひたり足のばさむとわが來れば月も照らすか夜半の湯壺を

湯の宿にしばし睦びし誰彼に別れ惜しみて出で立ちにけり

◆昭和十年七月号（第二十八巻第七号）

雪消ゆる庭に見えそむる黒土の日々にひろるをわれは樂しむ

ふかぶかと閉ぢし小川の雪とけて水まさりきぬ赤くにごりて

ながき冬雪にうもれし谷あきて汀に青くつはぶき萌えぬ

かぎろひの立てる庭べに立ち出でて雪がこひせる植木とり出す

あさなさな青笹ゆらぐ家うらの畑のほとり鶯の鳴く

薄雲^{うすぐも}のちぎれ飛び行くたまゆらに茜^{あかがね}いろの火星^{うしほし}仰げり
病癒^{やまひ}えて妻としみじみことほぎぬ鬼川^{うづち}氏の噂^{うわさ}しなが
ら
朝がすみたなびく森に小鳥啼^なき草萌^{くさも}ゆる野を仔馬走^{こまは}れ
り

◆昭和十年八月号(第二十八卷第八号)

ははそはの母を招きてわが妻は小夜床^{さよどこ}を敷く樂しから
まし
香^かりよきやまべ料理にたらちねの母の心は足^たらひるに
けり
はらからが幼きころの健^{すこや}けき父がおもかげ偲^{おもかげ}びさびし
む
歸^{かへ}りゆく母を送りて朝まだき若葉^{わつば}の峠^{たうげ}越^こゆるすがし
さ
山道^{さんだう}のところどころに佇^{たふす}みて春の日永に鳥が音を聞く

◆昭和十年九月号(第二十八卷第九号)

若葉^{わつば}うつ雨音^{はるみ}しげき狭間路^{はざまぢ}の吾にまぢかに郭公^{かくこう}の啼^なく

粽^{ちまき}まく頃としなりて新笹^{にひざさ}のひろぐる見れば昔おもほゆ
年^{とし}老いて佛^{ぶつ}のみちに入りゐたる父^{ちち}がをしへは尊^{たか}かりけ
る

襲^{おそ}ひくる山蚊^{さんぶん}のむれの多くして尿^{ゆまり}する間^まも立ちとまら
れず

みどり濃^のき深谷川^{ふかやがわ}の眞清水^{ましみづ}は激^{たぎ}ちしぶきて羊齒^{しだ}をゆる
がす

晴^はれゐたる低山^への上に朝の月あはくかかりて牡丹^{ぼたん}ふふ
めり

長雨^{ながあめ}に水まさりくる川くまに白き水泡^{みなわ}はならび渦^{うず}まく
かがなべて降りし雨やみ四方^{よも}の山とざしし雲も今朝は

晴^はれゆく
山川^{さんせん}の淺きながれの岩床^{いわしど}をのぼる山女^{やまめ}魚^うの光れるが見

ゆ
山畑^{さんばた}に二葉に萌^もえし唐黍^{たうきび}を惡鳥^{わるがらす}どもほじくりて食ふ

◆昭和十年十月号(第二十八卷第十号)

みどりなき林^{はやし}に近く接骨木^{はとこくれなゐ}は紅^{べに}きやに熟^うれそめにけり
のび足らぬ南瓜^{なみか}の蔓^{つる}にこの朝け雌花^{めいけ}咲きたり初花^{はつはな}にし

て

いかづちのとどろに鳴りて降る雨を驛遞の縁にめづら

しみ居り

いづち

雷は鳴りやまざるにはやはやも吾がさ庭べに夕映えの

する

日のくれし暗きさ庭に火をおこし吾子の釣りたる山女
焼きけり

夕ぐるる山の驛遞に菓子を買ふ畑がへり人金もたず來
る

川櫻さゆらぐ蔭に雛鷄等はおのおの砂をあびて並べり
穂はらみし稲葉のつゆに朝日かげかがやくあたり蝗は
飛ばず

吊橋におのが姿をながながとうつし出せり朝の日光は
デキタリス長くも延びてむらさきの花は穂先にわづか
残れり

夕ぐるる空をかぎれる白雲の線はろかなり久方の空

◆昭和十年十一月号（第二十八卷第十一号）

夕ぐるる山の驛遞に菓子を買ふ畑のかへり金持たず來

る

幾とせも續きみのらぬ小山田の稻づくり人を我はおも

ふも

馬なめて急ぐ山路に日は暮れて熊にあふかと話しつつ
行く

秋日さす山路にしばし佇みて蟲が音を聞く一時がほど
大雨に奥谷川の水まして堀につく鱒ここのぼれり
長雨に黒くなりたるぼろぼろの除蟲菊をこき居り山ふ
ところに

山道を森林主事と連れだちて林の話聴きながら行く
あららぎは千年あまり檜の木は七百年の太き木もあり

◆昭和十年十二月号（第二十八卷第十二号）

朝まだき濡れし落葉を踏みながら紅葉まばゆき峠をの
ぼる

深山べに心のどかに生きゐなば寂しからず秋ふかむ

夜も

團栗をひろひ集めて何にせむすべもあらねど拾ふたの
しさ

紅葉せる葡萄のつるを栗鼠は太き尾をふりのぼりて行
けり

七まがり電光形にのぼりゆく電光峠もみぢしにけり

「アララギ」第二十九卷（昭和十一年）

◆昭和十一年一月号（第二十九卷第一号）

秋晴れの峠をのぼる背向より朝日のぼりて我が影長し
小山田の稔らぬ稻穂垂れもせずただ黒々とすがれゆく
なり

もみぢせる暗き林の中行きて木の葉の落つる音を聴く
かな

みどり濃き笹生がなかのところどころ山葡萄の葉さや
にもみぢす

眞盛りて色づきそめし山澤の紅葉たづねて一人遊べり
深山べの人としなりてここしはしうら安けくも生きて
行くべし

◆昭和十一年二月号（第二十九卷第二号）

奥山はしぐれするらし久方の天の黒雲山をつつめり
秋ふかみ時雨つめたき峠路を馬をうたせてしづかに登
る

苔つける古き山女を描きたる繪はさながらに生けるが
如し

落葉して明るくなれる向つ峯のたをりに一本黄葉残れ
り

久にして逢ひたる甥にふるさとの生きのこりある人の
こと聞く

時雨ふる寒き夜更けに久々に逢いし甥をのこして山路
行くわれ

時雨降る夜ふけの山路馬うちて奥山里にいそぎ行くわ
れ

内賣りは丸木舟にて谷川を漕ぎて来る見ゆたそがるる
頃

◆昭和十一年三月号（第二十九卷第三号）

馬なめて夜ふけの山路駈け行けば暗がりの蹄ゆ火花は

飛べり

温室も作れぬ我には金たかき東洋蘭は買ふべくもなし
ありし日の父が好みし草つくり見覚え居りて我は趣味
もつ

温室に蘭をつくりて朝夕に心ゆくまま眺めたきもの
割引きの圖書祭の間に原色の園藝圖録あまたあがなふ
雪に明け雪に暮れゆく山里に稔らぬ年の冬は來にけり
ランプ消し寝ねむとすれば月光は障子に圓きあたま映
せり

◆昭和十一年四月号（第二十九卷第四号）

降りしきる朝の雪路を吾子と二人馬櫓に乗りてひたに
走れり

雪ふかき狭き坂路に群れてくる馬櫓を避けて馬休め居
り

奥山のせまき澤より出てくれは名寄平はひろびろと
して

ひろびろと拓けて行けるうまし田に幾年もつづき稻は
稔らず

丈低き歩兵少佐はたけ高き中尉副官をつれて威張れり

一等の病室にはこぶ食膳のとぼしきを見て心さびしむ

大學病院入院

人皆が死ぬてふことを恐るるがいつかは誰も死なねば
ならぬ

御佛は死ぬてふことを先に極め生くるは後にと諭した

まへり

賣店の棚に咲きつる君子蘭黄の花びらはゆたにひらけ

り 病院内の賣店

賣店の花を欲りせど我は買はず日に日に行きて見ては
戻れり

◆昭和十一年五月号（第二十九卷第五号）

あらたまの年祝ぎ餅を搗く粟も今年は稔らで持たぬ人
あり

いそのかみ古き佛のみ教へを守りて行かな道遠くとも
降りしきる雪の晴間のたまゆらに差せる日光のなごま
しきかな

朝な朝な新聞のくるを待ちかねて角力勝負を見るをた

のしむ 入院雑詠

くさぐさの赤き巾地きれぢを買ひて來ぬ我家の子等に土産せんとて

むづかしき試験をはりて退院し午後の日の照る衢路ちまたぢかへる

陰氣なる一等病室もなじみ來て五日目にかへる名残はありぬ

五日ぬし病院を出でてけふ一日ひとひ明るき街をさまよひてけり

◆昭和十一年六月号(第二十九卷第六号)

山川やまかはの凍れるくまのひとところ水は見えゐて鴨飛びたてり

電燈もなき山奥に住みつきてランプをともし八年やとせ過ぎぬる

雪ふかく降れる廣野に戦ひしくさの夢をありありと見し 日露役の夢一首

敵前に夜な夜なしのび畑の豆ぬき來て生きしあはれ幾いく日か

はやはやも歸りて行かむ妹まてる深山里みやまさとへのしづけき我家

◆昭和十一年七月号(第二十九卷第七号)

登山袋お負ひし姿のそがひより朝日はさやに射しゐたりける

大雪の深く積りし一つ家の雪のなかり馬いななけり人妻に用もなければ女なき宿はひそく物足ものたらぬもの

驛遞えきてい 驛遞ひとひに一日こもれば日に三度熊料理のみを吾に食はせぬ

川沿ひの柳の梢にほろほと鳴く朝鳥は何の鳥かも崖崩ゆる南なだりに黒々と土見えそめて陽炎かげろひの立つ春日はるびとさす日向に出でし豚の仔は雪の上走る見つつ和なごまし

貧しかる一人男の嫁よめとりに多くの酒を買はねばならぬ土見えて青笹ゆらぐ崖の上に深山鴉はしきりて啼けり雪どけの峠のばれば名の知らぬ鳥啼きゆきし後のしづけさ

◆昭和十一年八月号（第二十九卷第八号）

雪を掘り薪を積みをもる夫婦をし見つつし行けばなごま
しきかな

三つ歳の春を迎へてことごとく去勢されゆく仔馬あは
れむ

山の奥の雪消えてゆく朝な夕な我が生きさまはかそけ
くあるか

ひそかなる家に一人こもり居ればかぬちの音の近くひ
びき來

雲雀なく春野をゆけば我が乗れる若駒いさみ髪ふるひ
鳴く

馬うちて遠山道を行き來せば一日を鳥のこゑ聞きて過
ぐ

郭公は夜あけ前より鳴きはじめ日ぐれても鳴く物見ゆ
るにや

◆昭和十一年九月号（第二十九卷第九号）

弟が送り越したるふるさとの山春蘭をなつかしみ見る
金柑のここだくつきて熟れし實を吾が子は見つつ食ひ

たがりゐる

亡き父が好み植ゑたる縞萬年青久々に見て昔おもほゆ
遠近へ焰は見えて新ばりの笹焼く音を夜ふけてきく

風もなく鳥も聞えぬ朝ばらけしづかなるかな深谷のお
く

◆昭和十一年十月号（第二十九卷第十号）

日の光今や失せむとする時に地に浪うてる黒き影見ゆ
日蝕雜歌

日食は遂にすすみて一ときに光うせたる黒き日を見る
蒼白きコロナのなかに黒ぐろと光うせたる日の影はあ

り
黒き日のまはりに赤き色球の線あざやかに光れるが見

ゆ
色球の線に二つの球ありて紅さやに光りて見えつ

日の光遂にうせゆき久方の暗き彼方に星も見えけり
黒ぐろと光うせたるひとときは鳥も飛ばなくすくみた

りけり
牧草を食みつつゐたる緬羊は怖るるか小舎へ走りかへ

れり

黒き日の右の下より光りそめあはれ二たび明るくなりぬ

黒き日ゆ今しふたび差しそめしたまゆらの光うるはしきかな

◆昭和十一年十一月号(第二十九卷第十一号)

日もすがら社の森に繋がれし馬夕ぐれの歸りを急ぐ
山峽やまがひの畑ゆなをりをり響きくる鳴子なるこ代りの石油くすり鐘のおと
うそぎむき驛遞えきていを發つ二人づれは時計直しと藥賣くすりうりなり

鳥啼ける若葉林を山人はかかはりなきが如く過ぎ行く
去年こぞの春母を送りて越したりし峠今年も若葉こしとき越す
美深町いでて間もなく道のべに馬とまる宿やどと書ける壁
見ゆ

風もなき宿屋の庭の白きまでアカシヤの花は日もすが
ら散る

狭間路はざまぢのしげり小暗をぐらき澤なかゆ新開通の赤き崖見ゆ
小雨ふる山路を行きて雲間よりをりをり漏るる日光ひかげこ

ほしむ

◆昭和十一年十二月号(第二十九卷第十二号)

母がとる背戸の苺を杖つきて吾子は窓より見つつ羨とし
む

山道を歩みながらにふるさとの變り果てたる便たよりをおも
ふ

露しげき山田の畦とりを行く鶏との赤き鶏冠とさかは穂のあひに見
ゆ

山道の延びしあら草刈る人ら橋の上に休む長き鎌もち
春植すつきえし薄一株穂に出でてさゆらぐさまを窓越まどこしに見
る

山奥のあらくさ道もこのごろはゴムの轆わだちの幾すぢも見
ゆ

古ぼけしトラツクを見て山の子等ひとら一生に一度乗りて見
たしと

夕餉をへ裏の畑に立ち出でて蟲むしが音おとを聞く妻とわが子
と

「アララギ」第三十卷（昭和十二年）

◆昭和十二年一月号（第三十卷第一号）

亡き父が好みし鈴^{すず}をときをりに出だして振りぬ偲^{おも}ぶよ
すがに

二三日見ぬ間にかくもふとれりと妻は南瓜を撫でて見
るかも

露しげき朝の峠を越えくれば飛ぶ鳥も無く蟲が音もな
し

朝露にぬれし衣は日盛りになりていつしか乾くかなし
さ

秋風の吹ける峠にたたずめば雨雲ひくく峯わたり行く
かずかずの木の實うれゆく故里^{ふるさと}の秋戀^{こひ}しくもなりにつ
けるかな

◆昭和十二年二月号（第三十卷第二号）

豆腐つくる店なき村に住みてより妻と吾が子はずくり
覚えぬ

この頃は心ゆくまですがしさの柔き豆腐つくり馴れ

たり

雪ふかき深山の庵につつましく豆腐をひでて新年を祝^{いわ}
ぐ

北國に育ちて栗の木も花も知らぬ吾が子に栗を語れり
馬打ちてあかとき近き峠路の吹雪のなかを我は越えぬ
く

夜もすがら雪の川邊に火をたきてセメントの凍りふせ
ぎ居る人

◆昭和十二年三月号（第三十卷第三号）

ながき年日課となして振り來つる亞鈴ふれぬ日は寂し
かりけり

吹きすさぶ吹雪はやみて山のうへに圓^{まる}かなる月冴えわ
たるかな

あつぶすま重ねてもなほ寒き夜に貧しく病める人をし
おもふ

山寺の鐘にしばしは目をつぶる雪降りつもりたそがる
るとき

來^きむ年は我にも菊をつくれよと翁は言へど我は氣むか

ず
北國きたぐにの深山里ふかやまべは菊の花咲きさかる頃雪は降り積む
夜すがらの吹雪もやみてあかときの長鳴く鶏をすがし
みて聞く

たまきはる命をつなぐ一年ひとしせの米を買ひ得て心やすけし

◆昭和十二年四月号(第三十卷第四号)

落葉松からまつの苔の青きを濡らしつつ音のひそけく冬の雨ふる

おもおもと茂りつらなる原始林あはれいづべの果に盡くるか

あなあはれ堅く凍りて動けざる金魚の水とかすまどろさ

氷解けてなほも動かぬ金魚等は腹を横にしただに浮べり

かずかずのホルモンありとけだものの内臓をとり食たべ
みたりき

夜ふけてあなさびしもよ山峽にひびく鈴音馬櫓の音

◆昭和十二年五月号(第三十卷第五号)

川の面をとざして張りし氷の上おもき櫓うしひき馬つれて
来る

學校にいまだ行かざる小わらべ等ひねもす雪を掘りて
遊べり

なだれたる峠の崖に眞青なる笹ささむらすがい日光ひかげもさし
て

夕焼の空をのぞみて今夜またいたも凍らむを妻は恐れぬ

西山の夕焼空をしみじみと五月いつつきぶりに妻とながむる
村長も學校長も上衣ぬぎ餅をまきけり白雪のうへに

明けはなつ高山こうの秀ほに朝日子の輝きそめて雲赤く見ゆ
夜も晝もただごうごうと吹きつのる吹雪の音を聞きて

こもれり

柚が伐る澤にただよふ大櫓おほならの香かに親おやしみて心なごみぬ

◆昭和十二年七月号(第三十卷第七号)

吹雪ふきして往來ゆききとまれる籠こもり日に藏書目録びつくりてたぬ
し

杣が伐る斧おと遠く木靈こだまするたそがれ近き山の奥處おくどゆ
ランプともす天鹽てんしほの山ゆ出でくれば電燈あかるし旭川
まち

豆腐屋もなき山里を出でて来て旭川町に物ものを買ひ居り
山寺の鐘はひびけり雪やみし春の彼岸の夕ぐれどきに
雪ぎえの雨の一日をしづやかに語りくらせり妻とその
母と

◆昭和十二年八月号（第三十卷第八号）

春はるごとに庵いはりにちかく巢うをあめる背黒鶴せくろせき今年も來たり
日ひならべて山路往來ゆききし朝覺あさざめは疲れをおぼゆ老いの至る
か

新らしく雪に残せる大熊のふかき足跡見つさびしも
つはぶきの黄花咲きたる一株を空あき罐くわんに植うう心足たるが
に

道のべのいまだ芽ぶかぬ木の梢に鳴ける鶯うさやに見て
けり

太き芋たうすりて食ぶる朝あごとに忝かたじけなしと君をおもふも
はるかにも天をかぎれる高山に消けのこる雪か白き線見すぢ

百草ももくさの花咲きさかるなかに居るときに高まる川の音聞
く

岩魚いはな住むつめたき水の斷崖に櫻たづねても所思おもひをり
いとけなき吾兒をともしひこの山に片栗つみし昔おも
ほゆ

◆昭和十二年九月号（第三十卷第九号）

國遠く老いのいのちをかなしみて山田やまだの畔あそにつくづく
し摘む

今日もまた雨かとばかり目ざむれば霽はら降りしづみ鶯啼
けり 驛遞えきていの朝

朝靄あさの下りゐしづめる山行きて白樺林さびしきろかも
深山ふかやまべも春さりにけり紅くれなゐのしうりの若芽ひろぐる見れ
ば

出征の兵を出だせる家に立ち國旗あふぎて思ひふかし
も

夕ぐるる圍爐裡にやまべ焼きながら釣つりの手柄をこもご
も話す

◆昭和十二年十月号(第三十卷第十号)

低山は色とりどりに萌え出でて奥の高山紺色に見ゆ
驛遞の夜ふけの雨に明日越えむ雷光峠おもひつつ寝
る

やまべ釣りにうからを出してただ一人こもれる庵に
鍛冶の音す

暗きまで若葉しげれる澤なかにこだましてけり郭公の
こゑ

朝まだき山路をかよふ生徒等は虎杖の若芽食べつつ行
く

在りし日の父が呉れたる縞萬年青妻と日向に植ゑ替へ
し居り

老母に妻の看護をたのみおき心のこして山路いそげり

吹く風も戀しくなれる狭間路に山川の音さやけくぞ聞
く

◆昭和十二年十一月号(第三十卷第十一号)

よたよたと深谷川の吊橋をゆさぶりながら渡る小童
山ふかき驛遞の一夜しづかなり進み行く代のものの音

もなく

角力勝負聴かむとつけしラヂオにて戦のたより日々
きき居り

汽車のごとどろき来る山川の高鳴る音を背向より聞
く

戦に出でゆく兵をしみじみと思ひつつ行く雨の峠を

◆昭和十二年十二月号(第三十卷第十二号)

みどり濃き道べの森にここだくの懸巢さやげり秋近
かし

さはやけき天つ光のふりそそぐ梅雨ばれの畑ゆ息たち
のぼる

たわわにも稔れる山田かへり見て心やすげに兵出でて
行く

穂芒のさゆらぐ下に狸一つ置きて見たしと常おもひ
みる

書讀めるランプにすがることだくの蛾を拂ひつつ汗た
りて居り

風折れの朽木によぢて童らは蛇の卵を取るとさわげり

「アララギ」第三十一巻（昭和十三年）

◆昭和十三年一月号（第三十一巻第一号）

たまきはる命愛^{かな}しみ秋^{あき}ばれの朝の峠を落葉ふみ行く
かへりくる山路^{やまぢ}に秋の日はくれて近きより聞く彼岸中
日のかね

月夜よみ寒き夜ふけてさびしめる心いたはり蟲^{むし}が音を
きく

山路^{やまみち}をあるき疲れてつくねんと岨^{しづめ}の巖に腰かけて居り
白粉^{おしろい}のつひなる花は一朝^{ひとあき}の霜の白きにただに素枯^{すか}れぬ

◆昭和十三年三月号（第三十一巻第三号）

豊秋^{はゆあき}の薄荷^{はっか}蒸^むす夜のくだちゆき遠近^{とんぢん}に見ゆる里のとも
しび

しぐれ降る山路を行きて落葉^{はつば}ふむ我になづさふ谷水の
おと

とりよろふ山脈^{やまなみ}なべて落葉^{はつば}せり山の庵^{いん}に冬ちかづきぬ
薄荷^{はっか}蒸^むすからき香^かりはただよへり木枯^{こがらし}すさぶ峽路^{はざまち}ゆけ
ば

往診^{おうしん}に落葉^{はつば}ふみつ朝^{あさ}ぼらけ青啄^{あをけ}木鳥^{もどり}のこゑなつかし
み行く

◆昭和十三年四月号（第三十一巻第四号）

たたかひに命はてたる夫^{つま}響^{ひび}むる村^{むら}の女の心なげかゆ
眞白^{ましろ}にも降りつむ雪をなつかしみ笹生^{ささな}のあたり見れど
飽かなく

外套も帽子も持たぬ北國の子等は吹雪の中をおそれず
馬櫓^{うし}も通らぬふかき雪の山われ一人にて汗たりて行く
青空を見ざるもここに幾月か明けくれにみる雪のひと
いろ

新よめを迎へし相撲の負けたるに心いたため居り妻と我
が子は

誰れ誰れの相撲を父は好むかと子は訊^ききて居りラヂオ
の傍^{そば}に

◆昭和十三年五月号（第三十一巻第五号）

一杯^{ひとつぎ}の酒も飲み得ずすこし來てわりなきことのありと
覺えず

くぐくぐと理を云ひて人を強ふる禁酒論者の類にあら
ず

雪の上に長き垂氷ゆ垂る雫 何かな寂しぼたりぼたり
と

ひねもすを長き垂氷ゆ垂るしづく夕となれば凍みて音
なし

とよもせる吹雪の音を聞きながら山の庵の朝茶のかを
り

十年の昔となりぬいとけなき吾子を深山の旅に連れし
は

日もすがら吹雪きて暮るる西空にわづかに赤き夕映の
見ゆ

親子三人さむき如月のゆふぐれに手打うどんをつくり
て食ひぬ

◆昭和十三年六月号(第三十一卷第六号)

牛糞の火の上に焼きたるヂングスカン料理ひとたび食
ひたしと思ふ

永き冬山の庵の明暮はただ降りつもる雪のひといろ

おもき櫛ひきて汗たる馬の毛に眞白のつらに見ゆる朝
かも

大き音澤にこだましつぎつぎに伐らるる古木見つつさ
ぶしも

亡き父が老いての後のかずかずの手紙見出しなつかし
み居り

ははその母逝きましてそののちの父は年ごと旅に出
ませり

東京の茂吉も金をくれたりと宮島詣でのたよりにあり
ぬ

別れては何れの日にかまた會はむ語りあかせよ今宵ひ
と夜を 送別の宴

さびしさに堪へてをりをり隣びと深山の庵に時代語り
さ

深山べに冬を五月こもれども春はまだなり雪十尺まり

◆昭和十三年九月号(第三十一卷第九号)

今朝もまた郭公啼けど古妻の姿の見えぬ家のさびし
さ

ふりづまと夏の旅行く斯ること十年のうちにただ一度
のみ

雨ふりの滑る峠を夜ふけて妻と越しけり提灯つけて
朝ながめ夕眺めして鐵線花の咲く待ちかねつ紫のはな
かすかなる我に似し人ひろき世に一人ぐらゐはあるべ
かりけり

◆昭和十三年十月号（第三十一卷第十号）

百鳥の啼ける狭間の朝ぼらけすがしみて行く春のかを
りを

山川の水もやうやく澄みて來ぬいざ行きて見む山女魚
を釣りに

青若葉かをる深山のその息吹その山息吹かなしみて行
く

静かなる山の奥處の驛遞に一日こもれり鳥が音を聞き
家裏の原始林に燃えうつり夜もすがら見る火の渦巻を

◆昭和十三年十一月号（第三十一卷第十一号）

雨降に傘持たぬ子等おのおのも六尺にあまる路かざ

しゆく

長き鎌もちて草刈る人寄りておほに話せりみ戦のこと
なよなよと亞麻は伸びけりみ戦のさわぎもよその深山
畑に

佛法僧鳥ききて歸れば家裏の原始林にも一つ鳴きゐる
はるばると秋田あがたゆ訪ねきてただ一夜寝てかへり
行きけり

◆昭和十三年十二月号（第三十一卷第十二号）

しづかにも驛遞の夜は明けにけり朝床に聞く鶯のこゑ
海猫は近くに鳴きて暮れなづむ山をあかるく朴の花咲
く

足引の山の庵のあけくれはただ鳥のこゑ百鳥のこゑ
つばらかの聲もいつしか山を移り氣遠くなれる佛法僧
鳥

夕陽は狭間に映えて虹たちぬ山も里べも美しく見ゆ

「アララギ」第三十二卷(昭和十四年)

◆昭和十四年一月号(第三十二卷第一号)

幸ひはただ健^{すこや}けき人のもの富みて得らるるものならなくに

夕ぐれてさわだちにけり穗に出でし唐黍^{たうき}畑^{はた}をゆり渡る風

世をいとふ深山住ひにあらねども柴の戸を吹く秋風のおと

戸をくりて一人聞きけり慈悲心鳥深霧^{ふかぎり}こめて暗き眞夜なか

いそのかみ古き撫順の炭層の琥珀^{こはく}の珠ぞこれの念珠^{ねんず}は彼岸

◆昭和十四年二月号(第三十二卷第二号)

山の夜はやうやく更けぬ白雲の遠べの人を戀ひつつぞ寝む

たち割れば赤き西瓜のそこらくを霧の朝にもぐもおもしろ

(一八)

竹弓によもぎの矢そへおどしけり西瓜畑を荒す鴉を
ひさびさに強き雨降り道のべの埃^{ほり}つきたる草を洗へり
戦のたより聞くごとに手握^{たにぎ}りてますら武夫^{たけを}をしのびま
つれり

◆昭和十四年三月号(第三十二卷第三号)

女郎花また藤袴^{わねもかう}吾木香咲きのまがひにたもとほりつつ
かぐるくも葡萄熟^うれゆく朝ぼらけただに樂しき谷のせ
せらぎ

水垂るる崖をのぼりて家づとに龍膽^{りんだう}つみぬそのむらさ
きを

落葉せる山^{ひと}一とこ常磐木^{ときはぎ}のみどり見えつつ冬は來向
ふ

◆昭和十四年四月号(第三十二卷第四号)

朝しぐれしぐるる山路ぬれながらその山時雨^{やましぐれ}こほしみ
て行く

夜もすがらランプの芯をかきあげて漢口戦のたよりを
ぞ讀む

いささかの薄荷はつか作りて貧しくも老いゆく民を思へばさ
びしゑ
群山むらやまの紅葉もやがて天地あめつちのなしのまにまに散らまく惜
しも

乏しさも馴れにけるかな山住みも久しくなりて満ち足
らひつつ

◆昭和十四年五月号（第三十二卷第五号）

山住ひ久しくなりて春秋はるあきの移ろひもはやなつかしみこ
そ

あざやかに紅葉もみぢしにける深谷あけの紅になづさふ朝の霧か
も

見れど飽かぬ紅葉の錦こほしみて秋ばれの峠たうげ一人と
ぼとぼ

いつしかに渡らふ秋もふけにつつ初雪降りさやの
紅葉もみぢに

向つ峯の高き紅葉に降る雪は八入やしほの紅あけに白くつもれり

◆昭和十四年六月号（第三十二卷第六号）

ありなしの風にもあるかかすかなる山の庵いほに木の葉散
るおと

來む年も我すこやけく秋にあひ落葉ふまばやこの山道
に

こもり沼ぬの菱もいつしか素枯れゆき葦群に寄する漣なみの
おと

たたなはる群山脈むらやまなみの奥にして常世とこよさびせる志文内村
子供らが取りのこしたる霜がれの山葡萄とりぬ家苞いへづとに
すと

◆昭和十四年七月号（第三十二卷第七号）

いとまありて一人靜かに居る時し想ひ出づるかな歸ら
ぬ人を

帝王ほこりも埃とすてて長江をひとりの君は渡りゆきけめ

碧巖錄

一年を焚くほどの薪雪まきの上に積めばすがしも生木なまきの香か
り

山も川も野べも里べも五十年の名残はつきず別れゆく

身に 老母滿洲行

雪消えの庭はすがしも榎松の青きにぞ染む春の陽のいろ

◆昭和十四年八月号(第三十二卷第八号)

いそいそと妻は蒸餾水をとりはじむ春雨けぶるうそ寒き朝

朝まだき石路摘めり雪どけの冷たき水のまだ増さぬ間に

浅みどりみどりに萌ゆる家裏の川邊につづく石路のいろ

父のみの父がかたみの手紙にしのお老いたる父が旅のおもかげ

をりをりに出して偲べりははその母が織りたる紬の衣を

◆昭和十四年九月号(第三十二卷第九号)

きのふの朝爺が捕りたる熊の肉運びきぬ熊とりが妻のおほひぐま
大熊とれし夕べに樋口氏の賜びし芋入れて甘煮つく

れり

向つ麓の山櫻さきしかと望遠鏡とり出し窓あけて見る
母子して鯉漬け居りうすがすみ櫻花さく山のたそがれ
隣りにもその隣りにもこちごちに春べとなれば馬の仔
生る

◆昭和十四年十月号(第三十二卷第十号)

手作りの辨當持たせ妻子らを山陰の村に花見にやれり
山ふかく更けしづもりて聞きにけりその春雨のやはらかき音

山ふかき青き淵べに日もすがら眞白き水泡めぐりやま
ずも

眞清水の流れかそけき暗谷に朽ちて折れたる橋一つあり

ひそやかに春の雨ふり深谷の淵べに冴ゆる若苔のいろ

◆昭和十四年十一月号(第三十二卷第十一号)

走るには速き仔馬よ短き尾ふりふり細きほそき足もて
山峽に夕ぐれて鳴く郭公鳥わらはべ二人眞似ながら行

く
聞けど飽かぬ春の日永ひながの日もすがら若葉林ももどりの百鳥もどりのこ
ゑ

雨あとの月ほのかなる裏山に佛法僧の初はつこゑ聞けり
富人とみびととなりて歸らむ願もちはるけくも來し人々の墓
北海道移住者の墓

◆昭和十四年十二月号（第三十二卷第十二号）

たまゆらのつよき雷雨らいうに眞盛りの接骨木はもとこの花濡れて垂
り居り

軒下に薜むしにけりいつしかもおのづから生ひ地表を
おほへり

朝なさな移し植ゑたる甘藍に妻ねもころに落の葉をか
く

日もすがら郭公鳴きてあたたかし北國の山もすでに夏
なり

「アララギ」第三十三卷（昭和十五年）

◆昭和十五年一月号（第三十三卷第一号）

山住みも久しくなりて村人の誰れ彼れにだに心おきな
く
明け暮れの心さまねし山ふかくこもれる家に山吹咲き
ぬ

病人やまびとのうるさきまでの言種ことぐさも一日はきかず安らけきか
も

夏ながら木のくれやみは冷えびえし水垂り居れり苔ふ
かぶかと

海猫はこの奥山に巢をあむか海に居らずて山に來て鳴
く

◆昭和十五年二月号（第三十三卷第二号）

濃緑こみどりのおどろがなかに紫のあやめふみて朝の雨降る
徹臭かひきぬるき茶を飲み飯いひはめば驛遞いきての室なほかびくさ
し

さ緑の笹の新葉のひろびろとひろがる見れば夏闌たけに

けり

祖父も祖母も父も母も兄も逝きふるさと遠く我も老い
けり

深谷のくらし底ひに濡れながら化石を探ると石割りを
せり

◆昭和十五年三月号(第三十三卷第三号)

山住みも日長くなりて妻子らをいとほしと思ふことも

ありけり

月光のひかりさやけみ裏山の佛法僧鳥をつばらかにき
く

洪水に薄荷畑は湖のごと今朝ひろびろと青きもの見ず
秋ばれの今日の一日を留守居して一人厨に化石磨けり

思はざる金が入りこの里の人の心にゆるみ見えそ
む

◆昭和十五年四月号(第三十三卷第四号)

八月の眞陽てる午後の青空を豊旗雲はしづかに動く

接骨木は紅さに熟れにけり夏もたけたる濃みどりの

森

泥かぶれる薄荷畑を見るさへも大洪水のあととは寂しき
ものを

猫の乳のみて育ちし仔狸が座敷一ぱい走りまはり居
ふり妻の四十六度の誕生日今日ぞ壽ぐすこやかにして

◆昭和十五年五月号(第三十三卷第五号)

紅葉ひとつ青き疊に散りて來ぬ秋まだ浅き驛遞のひる

稚き兒等を集めてねもごろに體しらべぬ秋の一日を

去年採りし崖に龍膽また採りぬ我すこやけくこの秋に
會ひ

しみみにも伸びし薄荷の香は高し紫の小花幽かに咲き
て

朝時雨しぐるる野路の初あられ霰は頬をいたきまで打
つ

◆昭和十五年六月号(第三十三卷第六号)

來む年もまたこむ年も秋山の木の實拾はむすこやかさ

こそ

本あらの白萩さきて宵々の秋のさ庭をあかるめにせり
荷をつみて河渡りゆく影長し馬車のしぶきの寒き夕ぐ
れ
古き世のものの音よと耳澄まし鈴石ふれり秋ふかむ夜
に
山ふかく雪に寝ねつつ熊とるとものものしけれ獵夫の
装ひよそは

◆昭和十五年七月号（第三十三卷第七号）

咲きさびし菊も紫苑ももろ伏せり思はぬ時に初雪の降
り
初雪の消えたる後はまたもとの月は照らせり草枯の野
を
子供らの多き山家に豚と馬山羊もかけろ鶏もこがらし兎も飼へり
圍爐裏邊にうから集ひて芋食へり山木枯のさむき夕べ
に
ゆくりなく雪の夕ぐれ山蔭の新蕎麥打ちて届け呉れけ
り

◆昭和十五年八月号（第三十三卷第八号）

故里の秋の香りをなつかしみ思ひ遙けく柿をむき居り
もの皆の凍れる朝は起き出でて手出しもならずひたに
火を焚く
日ならべて八百臺の馬櫓が木の香匂はしつぎつぎに過
ぐ
春立ちし心地もせねどしきたりの追儺の豆も今宵まく
べし
撮影せり今日の良き日に足乳根の母が織りけるこれの
衣著きぬて

◆昭和十五年九月号（第三十三卷第九号）

大和なる吉野の山の奥ふかく獵夫がとりし猪のししむ
ら
かしこくも大みかどがゆるぎなき國の礎たてましし
日ぞ
久々になつかしみ見るふるさとの匂ひこもれる筍の皮
いつしかも一生過ぎきてうら安し悔いなき迄にいそし
みし身の

千年の年輪かぞふる良木も奥山なれば無價木と云ふ

◆昭和十五年十月号(第三十三卷第十号)

着古しの破れ衣を繕はむ縫糸もなしすべあらぬかも
据風呂もやうやく出来て運び來ぬ詠へしより五月過ぎ
て

黍の餅搗きて供へぬ乏しさの山の庵の春の彼岸に
山川の氷もとけて一ところ久々に見る水のすがしさ
東の山を離れて上りけり寒き彌生の圓き月かけ

◆昭和十五年十一月号(第三十三卷第十一号)

一年を焚くほどの薪を雪の上に積めばすがしも生木の
かをり

局員に無料種痘をなすことがしきたりの如この春もせ
り

石路は秋こそ咲かめ北國は春にさきがけ雪消えに咲く
丸き虹天の眞中に現れてけり雪消えそめし山峽の村

◆昭和十五年十二月号(第三十三卷第十二号)

現世に生あるものも無きものも土にかかはり持たざる
はなし

一昨日の暮れせまる頃とりたりと大き羆のししむらこ
れは

壽司つくり羆をあぶり誕生日ことほぐ庵に鶯啼くも
夜ふけて天にひびかふ山川のたぎつ音きく夢もやすら
に

「アララギ」第三十四卷(昭和十六年)

◆昭和十六年一月号(第三十四卷第一号)

孫つれて迎へに來たる山陰の媼とわが妻つれだちてゆ
く

長靴も取り片付けて地下足袋に山路し行かむ歩み輕ら
に

立ちながら乳のむために馬の顔長くつくれり神はかく
まで

驛遞の夕の餉は大皿に羆の肉を山盛りにして

◆昭和十六年二月号（第三十四卷第二号）

月あかき夜ふけの庭に下り立ちて佛法僧の初聲きけり
古大豆肥料にせむと春雨の降る日すがら妻は汗流し煮
る

朝まだき郭公鳴けり澤ぐるみ青きたり花垂るる梢に
おのおの太き路とりかざし來ぬ學校かへり傘持た
ぬ子等

◆昭和十六年三月号（第三十四卷第三号）

生徒らは破れゴム靴に音たてて朝の山道はしやぎなが
らに

山川の岸べに近くひとところ白き砂に水草の青
雨の峠親馬の後へに濡れぬれて仔馬つきゆく筈を着た
る

晝もなほ暗き峠の頂に汗ふきながら熊を氣にせり

◆昭和十六年四月号（第三十四卷第四号）

山ふかき川べを來つつ見守れり緑さやけく藻のゆらげ
るを

穂に出でし燕麥畑のすがしさよ風がもてくるからす麥
の香

朝日光いろづく雲のうごき居り夏もたけたる百鳥のこ
ゑ

もろもろの花すぎゆきし傍に白萩たかく伸びてふふめ
り

◆昭和十六年五月号（第三十四卷第五号）

北見なる野付の宿に二夜寝て今朝かへりゆく名残はつ
きず

一人子の縁組すると父吾は遠く北見の秋を旅せり
かにかくに話まとめて安らけく月あかき夜を一人ねむ
れり

道のべのおどろがなかに立ち古りし松浦判官の跡どこ
ろこれ

◆昭和十六年六月号（第三十四卷第六号）

夜のふけて月光さむき北見野のまだ見ぬ村を街を旅ゆ
く

秋づける北見の空はさぶしもよ見知らぬ街はなほしさ
ぶしも

山道をいゆきかへらひ雨ふりの峠越えけむことも幾年
幽かなるわざを尊み今日もまた一人越えなむ雨の峠を

◆昭和十六年七月号(第三十四卷第七号)

神無月十六夜の月を仰ぐだに人の戀しも山住も舊り
打橋につもる初雪めづらしみ渡れば残る兒らが足形
ひむがしの珍の光のさしそめて麓へ近く朝の虹たつ
あられまじり時雨降りしく村道を薪の用事をもちて我
が行く

◆昭和十六年八月号(第三十四卷第八号)

朝しぐれ枯野に現れし二重虹道ゆく子らと立ちて仰げ
り
ほしいままに生きても行かな人の道ふみあやまらぬ
程々にして

宵々の蟲も減りゆき山ふかき庵のほとり木の葉ちる音
山住みもけ長くなりて吹雪きせぬ静かなる夜はもの足

らずけり

◆昭和十六年九月号(第三十四卷第九号)

嫁ぐ子の荷を送り出し心安く追儼の豆も今宵まくべし
嫁ぐ子を送りて親子三人づれ遠く北見の冬の旅ゆく
いそしみて十三年を山に過ぐ生きていそしまむ今ゆ幾年

◆昭和十六年十月号(第三十四卷第十号)

北見へと遠くとつげる我子より食用油が欲しと云ひ來
ぬ
垂乳根の母が漬けたる奈良漬が欲しと云ひきぬ嫁げる
子より
一人子の嫁げるのちの寂しさもいつしか馴れて安き明
けくれ

◆昭和十六年十一月号(第三十四卷第十一号)

しげしげと父が顔見て手を握りまだ生きて居るとひた
に喜ぶ

うめく聲ききて眠れず夜もすがら病^やみ臥^こる子の傍^{そば}にも
の思ふ
昨夜^{さざりよ}一夜たびたび起こし背の君に叱^なられたりと父に告
げ居り

◆昭和十六年十二月号（第三十四卷第十二号）

夜もすがら夢を見たりと父我にさまざまのこと話して
笑ふも
幾^いときも生命^{いのち}たもたぬ子をみとり間^ままくひまなく側^{そば}を
離れず

「アララギ」第三十五卷（昭和十七年）

◆昭和十七年一月号（第三十五卷第一号）

安らかに子は逝きにけりみ教の尊きをひと世守りつづ
けて
逝ける子の形見とここにいささかの着物を貰ひ寂しく
歸る

◆昭和十七年三月号（第三十五卷第三号）

かそけくも消えゆく脈に手ふれつつ愛^{いと}し子の臨終見守
りにけり

微^さけくも消えゆく吾子の心音を聴診器もて父われは聴
く
淨^{きよ}なる温泉にひたり我ら三人涙にぬれし顔を洗へり

温根湯

◆昭和十七年九月号（第三十五卷第九号）

住み馴れし天鹽をたちて山^{やま}越えの北見の町へ冬の旅せ
り
老人^{おおいびと}の我らはるばる移り來て荷をほどきけり冬のさな
かに

湯氣たたぬ谷に下^おりゆき湯か水かさやりて見たり樋の
出口に
雪ぎえのわづか乾^{かわ}ける麓よりいまだ芽ぶかぬ山を仰ぎ
つ

◆昭和十七年十一月号(第三十五卷第十一号)

はるかに北見の山を振りさけぬ汝^なが住みし庭に父母
は立ち

高原^{たかはら}の草深道を夜どほしに歩きつかれて曉^{あかとき}となる

ぜんまいも蕨もほほけし高原をゆるめると過ぐ馬に乘
りつつ

「アララギ」第三十六卷(昭和十八年)

◆昭和十八年一月号(第三十六卷第一号)

秋ばれの午後の野路を樂焼のすすびし盥^{もひ}をさげてかへ
れり

新麥の香すがしみおほらかに霽れゆく野路の露ふみて
きぬ

ゆくりなく一葉の紅葉出でて來ぬ幾年か前書^{ふみ}にはさみ
し

とりたての鹽焼^{しほやき}山女魚^{やまめ}香りをり涼風たてる夕餉の膳に

◆昭和十八年十月号(第三十六卷第十号)

ふるさとはらから集ひ晩春^{ばんはる}の一夜^{ひとよ}を共に語りあかせ
り

藤浪の花を仰ぎて教へけり北國にのみ一生^{ひとよへ}經しつまに
ほのぼのと朝光させる武藏野をすがしみにつつ親子旅
ゆく

「アララギ」第三十七卷(昭和十九年)

◆昭和十九年一月号(第三十七卷第一号)

國遠く離れ來て老いし我さへや忘れかねつる麥焦^{かうせん}の香
を

永遠^{とわ}の別^{わか}れと知るよしもなく親も子もただ假初^{かりそめ}の別と思
ひき 憶父

山形の街に餅屋もなくなりて今はた尋ね寂しきものを

◆昭和十九年四月号(第三十七卷第四号)

家裏に郭公鳴きて明けにけり目ざめ清^{すが}しきかね山のあ
さ

濁れるも眞澄める水もとけあひて明日はいつくの涯までかゆく
むつかしき業にいそしみ明けくれをあり經つつ我ら何を希はむ

【補記 「アララギ」誌掲載歌以外の短歌】

アララギ同人編『アララギ年刊歌集 第十五（昭和十三年）』（岩波書店、昭和十四年十月五日第一刷發行）

北海道 守谷富太郎

かそかなる業をいそしみ心足りて六十年あまり過ぎ來りぬる
亡き父が老いての後のかずかずの手紙見出しなつかしみ居り
山櫻さきて百鳥鳴くころは匂ふ若菜をつむもおもしろ

註

（1） 近年の新聞記事には、西勝洋一「道内文学（短歌）斎藤茂吉と中川町」（北海道新聞夕刊二〇一三年十月二十九日付）、斎藤由香「斎藤茂吉ゆかりの地 中川町を訪ねて」（北海道新聞夕刊二〇一三年十二月十七日付）がある。

（2） 山形県上山市に「斎藤茂吉記念館」があるが、札幌市にある「北海道立文学館」にも、茂吉の第一歌集『赤光』初版本や、茂吉の書簡（全集未収録）等、貴重資料が収蔵されている。

（3） 「賣店」は「賣」の字だが、「買ふ」の場合は、他の作品でも「買」の字が用いられている。原文のママ。

（4） 「春日」のルビは「はるび」が正しいが、「はるび」は原文のママ。

（5） ルビの「●」部分は読み取れなかったが、次の歌と照応すると、「ふりづま」であろう。

なお、校正に際しては、本学大学院文学研究科修士課程の田中涼斗さんの少なからぬ協力があつた。末尾ながら、謝意を記しておきたい。